

序章

人間は遙か昔から、知恵と技術によってさまざまなものを作ってきた。人は、新しくより良いものを生み出すことで、文明を発達させ続けている。ところが、同じ人間の創作物の中でも、芸術・文芸の領域においては、必ずしもそうとはいえない。最初に作られたオリジナルの価値が重視され、あとから作られたものは、模倣、コピー、劣化版などとされる。新しく作られたものであるにもかかわらず、価値が下がることもしばしばである。人の技術や知恵が日々進化するものであるなら、それに逆行する現象である。本書で扱う王朝物語文学もまた、そのひとつだといえる。

王朝物語文学といえば、まず挙げられるのは『源氏物語』である。その絶大な影響を受けた、『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』があるが、『源氏物語』を凌駕する物語としては扱われていない。その後、中世においても王朝物語は作られ続けていた。特に鎌倉時代の後嵯峨院朝では、王朝物語が再び隆盛し、多くの物語が生まれたとされる。散逸せずに残された作品がいくつかあるが、先行物語を超える評価をされていないどころか、存在すら広く知られていないものも多い。いずれにしても、『源氏物語』以降の王朝物語は、先行する物語の模倣として扱われ、ないがしろにされてきた部分が少なからずある。はたしてそれで、『源氏物語』以降の物語、特に中世の王朝物語を、理解できているといえるだろうか。平安時代後期から鎌倉時代に作られた物語に、王朝物語文学としてどんな可能性

があったのかを、正面から捉えることも必要だと思われるのである。そこで本書では、中世王朝物語のひとつである『いはでしのぶ』を読み解いていくことにする。

『いはでしのぶ』が作られた後嵯峨院の時代は、王朝文化の復興がなされる一方で、南北朝時代・室町時代に向かつて、国の形や文化・文学が様変わりしていく直前でもあった。もはや王朝文化や王朝物語は、衰退の道をたどるしかないことが、貴族たちの目には明らかだっただろう。そう考えれば、この時代に作られた物語文学には、王朝物語文学そのものだけでなく、鎌倉時代初期の貴族たちのイデオロギーが孕まれているといえるのではない⁽¹⁾か。今井源衛氏⁽²⁾は平安末期に作られた物語について、「日一日と落ちぶれてゆく公家や女房たちの、いわばしがない自慰の手段として擬古物語は作られた」、または、彼らの矜持を守るために「絶えず再生産してゆくという行為こそ重要だった」とする。これらの指摘をはじめとして、物語が作られ続けたことには、消極的な目的や理由が付与される場合がほとんどである。あまた作られた物語のひとつである『いはでしのぶ』を読み、中世に作られた王朝物語に積極的な一面を見出すことを目指したい⁽³⁾。

本書では、王朝物語文学に通底するモチーフや事象を通して『いはでしのぶ』を読み解いていくことで、本作が先行物語の影響を受けつつも、それらとの差異化を図ろうとした痕跡を探る。ひとつひとつのモチーフを辿っていくと、そこには先行する物語との類似と差異が、共存していることがわかる。それらは偶然的産物ではなく、物語への深い理解と、周到に計算された執筆態度に裏打ちされたものではなからうか。先行物語のモチーフを用いるのであれば、模倣をするだけでも構わないはずである。そこに差異を生じさせざるを得なかったのは、『いはでしのぶ』に沿う形に、モチーフを変化させたからだろう。つまり、先行物語との類似と差異の間隙からみえてくるのは、『いはでしのぶ』の本質やオリジナリティの一端だということになる。その概観を先に述べると、「回復を志向する」物語という、

本作特有の在り方が炙り出されてくるのだ。闘争を避けて乱れを均す物語は、同時代の作品にもまみられる。『いはでしのぶ』の特徴は、乱れない平穏な物語世界を保つという姿勢にあると考えられる。

物語とは、何らかの闘争や事件によって世界が乱れ動くさまを、主に紡いでいくものだ。それに反して『いはでしのぶ』は、乱れ動いた世界を均し、平穏を取り戻す過程が、物語になっていく。なぜ本作は回復を志向する物語として編まれたのか、本作が成立した中世という時代についても目を配りつつ、『いはでしのぶ』という物語を捉え直していきたい。

一 中世王朝物語『いはでしのぶ』について

個々の論考に入る前に、本書で扱う『いはでしのぶ』という物語について確認することから始めたい。

王朝物語文学が隆盛を極めたのは、平安時代である。しかし、平安時代の終焉と同時に、王朝物語のすべてが絶滅したのではない。鎌倉時代に入り武士の時代になっても、王朝を舞台とする物語は作られていた。散逸してしまった物語を含めれば、作品数は平安時代に劣らない⁽⁴⁾。それがいわゆる「中世王朝物語」や「擬古物語」と呼ばれる作品群である。本書ではこれらの王朝物語の側面を重視して考察を進めるため、「中世王朝物語」と呼称することにする⁽⁵⁾。

『いはでしのぶ』は鎌倉時代前期、後嵯峨院時代の成立とされる。一二〇二年成立とされる『無名草子』にその名がみえないこと、一二七一年成立とされる物語和歌集『風葉和歌集』に三四首入集していることから、一二〇二年から一二七一年の間に成立したものと推定されている⁽⁶⁾。後嵯峨院時代といえば、院政が復活した、戦乱もなく比較的平和な時代である。そのため、典例や文芸の復活により、白河院政期をはじめとする、過去の王朝の再現が目指された時期でもある⁽⁷⁾。王朝への憧憬意識の高まりに呼応するように、『いはでしのぶ』前半部分では、皇統の復活や融合と

いったテーマが中心に据えられている。撰閲家の家督継承の有り様を描く物語後半とあわせると、物語世界をふたつの側面から描き出す立体的な構造を持つ作品となっている⁽⁸⁾。

本作は完全な本文が巻二までしか現存していないが、残された抜き書き本（三条西家本）や断簡によって、推定全八巻とされ、長編物語であったことがわかる。物語の長さにも、王朝物語の面影が残っているといえよう。内容についても、『源氏物語』『狭衣物語』などの影響を、強く受けている。その一方で、主人公格の男君が出家遁世するという中世らしい筋書きも持ち合わせているのが特徴である。『風に紅葉』『恋路ゆかしき大将』などの後統の中世王朝物語への影響が見出せることから、『いはでしのぶ』は当時の物語の中でも、重要な存在として位置づけられていたと考えられる。

前述した通り、中世王朝物語は『源氏物語』をはじめとする先行物語の影響が色濃く、それらの模倣であるという評価が一般的だ。たしかに中には、先行物語の文をそのままの引用している場合もある。しかし、同じ表現を用いながら文脈をずらしたり、複数の作品を複雑に引用して、新たな趣向を持つ場面を作り上げたりと、単なる模倣では片づけられない部分も多く含まれている。『いはでしのぶ』においても、単純な物語引用は少ない。先行物語についての多くの知識や深い理解がなければ、それらを組み合わせて、別の物語を成立させるのは難しかっただろう。前後に成立した物語と深くかわる中世王朝物語を読み解くことは、遠からず我々が未だ知り得ない、王朝物語の一側面の発見にもつながるだろう⁽¹⁰⁾。物語文学にとってのひとつの転換期に成立した、『いはでしのぶ』のような物語を研究することは、物語文学史全体を俯瞰する上でも重要だと考えられるのである。

二 『いはでしのぶ』研究史概要

本作の本格的な研究は、一九三〇年代の小木喬氏の研究⁽¹¹⁾を始発とする。その後、小木氏が研究成果と校訂本文をまとめた『いはでしのぶ 本文と研究』（笠間書院、一九七七年）が刊行されると、一九八〇年代から作品論が増加した。その中で、本作は「いはでしのぶの恋の物語」というテーマで一貫されていると論じられ、現在でも主流となっている⁽¹²⁾。その流れに一石を投じたのが、三田村雅子氏の論考⁽¹³⁾である。天皇家と撰閲家双方の家門復興、視線の物語、皇女の問題など、その捉え方は示唆に富んでおり、本書も含め現在の『いはでしのぶ』研究に大きな影響を与えている。

二〇〇〇年代では、新出資料である冷泉家時雨亭叢書の断簡の発見と、横溝博氏による考察⁽¹⁴⁾により、巻四の抜き書き本文の補完がなされ、物語後半の内容の一部が明らかになった。その他にも、横溝博氏による右大将物語の考察や作中和歌の典拠の検討⁽¹⁶⁾、勝亦志織氏による皇女・女院についての論考⁽¹⁷⁾などにより、主題論だけでなく個々の問題に特化した議論もなされてきた。一方で、『いはでしのぶ』が、どんな物語世界を作り上げているのかという点については、十全に論じられていないように思われる。巻三以降が抜き書き本文であるため、難しいとしても、物語の全体像を論じる試みが必要ではないか。

これまで本作について多く指摘されてきたのは、先行物語との類似や物語取りの問題である。『源氏物語』だけでなく、物語冒頭が酷似している『狭衣物語』とのかわりについては、多く指摘されている。近年では『うつほ物語』や『今とりかへばや』などの物語の影響も論じられている⁽¹⁸⁾。本作の作者は未詳とされるが、複数の物語への並々ならぬ知識と理解からみても、王朝物語に耽溺していた人物像がうかがえる。王朝物語を知り尽くした作者が、何を先行物語と重ね、どこに差異を生じさせたのかを検討することで、『いはでしのぶ』が、鎌倉時代前期の物語文学に何を展望し、それをいかに作品の中に落とし込んだのが、より明確になるはずである。先行する物語との比較を重視しつつも、本書ではあくまでも『いはでしのぶ』という物語の何たるかを問いたい。